

2018年2月4日 聖書：マタイ4章1-11節

題：「み言葉によって生きる」 “Living by the Word of God”

序 論

- 「人生」についての明訓を有名人が沢山残している。
 1. 徳川家康は、「人生は、重い荷を負って遠い道に行くようである」と言った。
 2. 石川啄木は、「働けど、働けど、我が暮らし楽にならざりき」と、
 3. 林芙美子は、「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」と言った。
- これらの言葉に共通している主張は、人生は、決して楽なことばかりではない。むしろ、先週も学んだように、人生は、苦難・試練の連続であり、「戦い」であると言う事実である。
- イエス様も弟子たちに、「あなたがたは、世にあっては艱難がある」と言われた。
- しかし、聖書は、これも先週学んだが、神様の御心は、私たちがその戦いに「勝つ」ことであり、更には、その勝利を可能にするのが、キリストの十字架と復活による「福音の力」であると告げる。
- 「世に勝つ者は誰か。イエスを神の子と信じる者ではないか」(第Iヨハネ5章5節)。
- 即ち、福音によって、私たちの人生の勝利の道は、既に、完璧に準備されているのである。
- 問題は、その準備された勝利の力、福音の力を、人生と生活の実践、また実際の中で、如何にして、引き出すか、実体験していくかである。
- ここで二つの聖句を読みたい。
 1. ヘブル4章15節「……」。
 2. Iペテロ2章21節「……」。
- これらの聖句から言えることは、
 1. イエス様は、私たちと同じ人間になられた。そのことの意味は、イエス様も私たちと同じ人間として「弱い」存在であったことである。
 2. しかし、イエス様は、人間として、私たち同様に、この世にあって、誘惑や試練・苦難に弱かったが、それらに「勝つ」と言う模範を残されたのである。
- それでは、イエス様は、模範として、どのようにして勝利を経験されたのか？
- 今日は、そのことをマタイの福音書4章1-11節に記されているイエス様が人間の模範として洗礼を受けられた直後に経験した悪魔との戦い、試練にどのように勝利を取られたかの記事から学びたい。
- 信仰生活、人生における「試練」、「誘惑」という問題は、正に私たちの毎日、また一生における最も現実的、かつ、差し迫った問題であり、重要であり、生命的な問題である。
- ここで、誘惑と試練についての聖書的見解の一つにごく短く触れておきたい。
 - (1)この箇所は、そもそも、人々に、或は聖書学者たちによって、「イエス様の荒野の誘惑」と言われたり、また「イエス様の荒野の試練」とも言われたりしている。
 - (2)ある人々は、「誘惑」、或は「試練」という二つ言葉は、二つの別の事柄のように思うかもしれない。
 - (3)しかし、実は、この二つの言葉は、1, 3節で「試みられる」「試みる」と日本語で訳されているギリシャ語「パイラザイン」という一つの言葉から来ている。
 - ★実は、この一つの言葉に「試練」と「誘惑」の二つの意味があり、どちらにも訳し得るのである。
 - ★このことは、ヤコブの手紙1章12-14節にも見られる。
 - ★「主の祈り」でも、日本語では「我らを**試み**に遭わせず」であるが、英語では「Lead us not into **temptation**(誘惑)」とある。
 - (4)即ち、聖書において誘惑と試練は共通の要素、ルーツをもっているのである。換言するなら、
 - ★私たちが、試練を受けるとき、必ずそこには、様々な誘惑がある(例えば、信仰を妥協しようとしたり、捨てようとする誘惑である)。
 - ★また逆に、私たちが誘惑されるとき、それはまた、私たちにとって、信仰が試され、成長する「試練」であるということができる。
- 即ち、イエス様は、ここでその信仰の試練、悪魔からの誘惑を経験されたことが記されている。

本 論

1. このイエス様の試練と誘惑の経験が教える最初のレッスンは誘惑・試練はどんな人にも来るといふ事実である。

A. 信仰生活における一つの大きな誤解がある。それは：

1. 清い人は誘惑がない。信仰に成長するなら試練や誘惑がなくなる、と言う誤解である。
2. 逆に言うなら、私がこんなに誘惑を感じ、試練にあうのは、清くないから、信仰が強くないから、弱いから、いい加減だからなんだ、という誤解である。
3. そう頭で思い込んでいる人が多いだけでなく、頭では、そうでないと分かっている、感情的にそう思って落ち込んでいる人、元気がない人が少なくない。

B. 「それは誤解である」となぜ言えるか？ 答えは、「イエス様も試練を受けた」という事実の中にある。

1. 誘惑と試練は、その人が清い、清くない、信仰が成長している、していない、その他、あらゆる状況に関係なく、すべての人に来るのである。
2. その証明は、罪のない、全く聖なるお方であるイエス様も誘惑と試練を常に受けておられたと言う事実である。

C. そのことを、もう少し詳しく見てみたい。確かに、イエス様は一人の人間として来られたが、同じ人間でも：

1. イエス様の場合、家庭の信仰がしっかりしていた。
 - (1) すなわち、マリヤとヨセフという極めて信仰の篤い両親の下で育った。
 - (2) 今日的に言い換えるなら、模範的なクリスチャンホームに育ったのであった。
2. それだけではない。両親の信仰だけでなく、**本人の信仰**がしっかりしていた。
 - (1) 「あの家は、両親は信仰に熱心だが、どうも息子や娘は・・・」と言われることがよくある。信仰は最終的に個人の問題である。
 - (2) しかし、イエス様の場合、単に両親の信仰が篤いものであったというだけでなく、
 - (3) 12歳のときに、彼が初めて両親とともにユダヤ人の祭りに参加し、神殿に行ったときのことルカによる福音書に記されているが、
 - (4) そこで、明らかに記されていることは、イエス様が、両親より遥かに信仰に熱心で、聖書に深い洞察と知識をもち、神様に献身していたからである。
3. 更には、イエス様はこのように信仰的な生い立ちに恵まれていただけではなかった。このマタイの4章で試練と誘惑を経験されたときの直接的背景を考えるなら、このときイエス様は、
 - (1) 洗礼を受けたばかりで、天の父なる神さまの御声を聞き、聖霊の祝福を受けた直後であった。即ち、霊的に祝福され、高揚していた直後であった。
 - (2) また、40日にもわたって断食をして祈った直後であった。人はこのようにして、断食して祈りに集中し、霊的に高められようとする。イエス様は、正にそのようにして、霊的に高められ、恵みを経験した直後にこの試みと誘惑を経験されたのである。
 - (3) 言い換えるなら、人はどんなに霊的に素晴らしい体験をし、祝福され、高揚されたとしても、なお試練と誘惑を経験するということが、イエス様を通して証明されたのである。
 - (4) しかも、イエス様は、このようなサタンへの攻撃、試練と誘惑を、ゲッセマネの園で死を覚悟して祈るときまで、一生涯絶えず受け続けたのである。
 - イエス様が、ここで受けられた誘惑・試練について詳しく記すもう一つの福音書ルカも、またこの試練・誘惑が、即ち悪魔の攻撃が、3回にわたるものであったことを告げている。聖書における「3」という数字は完全数であり、それは、このような誘惑がいつも、絶えず、何回もあったことを象徴している。
 - **ルカは4章13節**で、悪魔はこのあと、「**暫くの間**」だけイエス様から離れたと記し、この後、間もなく再びイエス様に悪魔が付きまとって誘惑したことを暗示している。
 - ペテロが、あの最も大切な信仰告白「あなたこそ生ける神の子、キリストです」をしたときのことを思い出して頂きたい。イエス様は、そのペテロの告白を大変喜ばれ、ほめられたが、そのすぐ後で、ご自分の十字架の苦難の預言を弟子たちに告げられた。するとペテロは、人間的にイエス様を愛し思う余り、「そんなことがあってはなりません」と思わず叫んだ。それに対しイエス様は間髪入れずにペテロに向かって「サタンよ。退け」と言われた。即ちイエス様の生涯には、そのような弟子の人間的なやさしさの中にさえ、悪魔が潜み、イエス様を十字架の道から外そうとしていたのである。

4. このようなイエス様を見る時、誘惑や試練を受けたからと言って、気落ちしたり、自分は霊的、信仰的に駄目だなどと思ってはならない。それは本当に「お門違い」である。
- (1) 即ち、イエス様を模範として、どんな人も、必ず、誘惑と試練を経験するのである。
 - (2) むしろ、私たちに見込みがあるからこそ、悪魔は私たちを誘惑し、試練に遭わせるのである。私たちにこのまま祝福され、高揚されて進んでもらっては困るからである。
 - (3) 私たちをかって長い間 10 年以上にわたってサポートしてくれていた信仰の成熟したご夫婦がこう言った。「私たちが、この人、この働きは、神の前に尊い働きだと信じ、祈ってサポートを始めるやいなや、しばしば、いやなこと、つらいこと、色々な生活の困難が私たちに始まる。そのときしばしば感じることは、『アー、これはサタンだな』と。サタンは、私たちがその人を、その働きを支えたら、神様の御業が進むことを知っているから、何とか邪魔をしようとしているのであることが良く分かる」と。
 - (3) だから、私たちに試練や誘惑が来たら、むしろ、「私は、悪魔に狙われるほど、神の国の重要人物になったのだ」と感謝し、へりくだる中にも、気落ちするどころか、強くなって立つ必要がある。
5. 要するに、ここで大切なことは、誘惑や試練を受けるか、否かの事実の中にあるのではなく、それに打ち勝つことである。
- (1) ある人は言う：鳥があなたの頭の上を飛び交うことを拒むことはできなくても、彼らがあなたの頭の上に巣を作ることを防ぐことはできる」と。
 - (2) 誘惑・試練に遭遇することと、それに勝つ・負けるということは、全く別のことである。
 - (3) イエス様の生涯に正にそれを見る。イエス様も散々誘惑された、数多くの試練にも遭われた。しかし、それらすべてに打ち勝たれた。ヘブル4：15「・・・」
 - (4) では、どのように打ち勝たれたのか？ そのことを今日のテキスト、イエス様が、受洗、断食後に荒野で経験された悪魔との戦いでの記事が如実に教えている。
 - そこには、イエス様が、悪魔から誘惑、挑戦を受けるたびに繰り返された言葉が記されている。それは、「・・・と書いてある」(4、7、10 節)という言葉である。
 - その意味は、「・・・と聖書に書いてある」の意味である。即ち、イエス様は、悪魔との戦いの武器として、聖書の言葉を用いられたのである。
 - しかも、受けられた3回の試練、挑戦、誘惑に全部である。一回だけではない。ほとんどでもない。すべての勝利は、「聖(み)ことば」「聖書の言葉」による勝利であった。
 - それは、イエス様の「聖言」に対する信仰の表われであった。
 - (5) パウロも、「聖(み)ことば」「聖書の言葉」についてこのように言っている。
 - 先に指摘したように、彼もまた、私たちの人生、毎日の生活は、霊の戦いであることを意識していた。
 - そして、私たちに毎日の生活の中、人生の中で戦いを挑んでくる悪魔の攻撃に対抗するための神様の霊的な武具についてエペソ人への手紙6章で語っている。
 - その中で彼は「聖書の言葉」を「御霊の剣」と呼んでいる。「御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい」と(6：17)。聖言は、「剣」即ち、戦いの武器なのである。

II. それでは、最後に、短い時間、イエス様と、この勝利の秘密である「聖書のみ言葉」との関係について、もう少し詳しく見たい。

A. イエス様は、明らかに、聖書の言葉を「暗誦」しておられた。

1. イエス様は、ここで3回(どれも申命記からであったが)とも聖書を記憶から引用された。
2. それは、少なくともイエス様が聖書を何度も何度も読んだことを意味していた。
3. しかし、この当時、聖書を読むということは並大抵のことではなかった。
 - (1) iPad も iPod や iPhone も無かったし、モバイル式バイブルもなかった。
 - (2) それ以前の問題として、そもそも「個人」が聖書を持っているということ自体が考えられなかった時代である。

- (3)当時、聖書があるところと言えば、それは、当時各地域にあった、今の私たちの教会にも相当するシナゴグ、会堂と呼ばれる集会所であった。しかも、全書ではなかった。
- (4)イエス様は、忠実なユダヤ人として毎週そこまで行って聖書の御ことばを学んでいた。
- (5)当時の人々は、そこで習ったことば、読んだことばを必死になって暗誦したのである。
- (6)即ち、彼らは、何度も何度も同じことばを繰り返し心で、口で唱えて覚えたのである。
3. 聖書の言葉を、悪魔の誘惑と試練に打ち勝つために神さまがくださった武器として用いるようになるためには、それを読み、よく味わうだけではない、それを暗誦しなければ、いざというときに剣として実際の戦いに使えない。戦いのときに、いくら立派な剣であっても、もし家にそれをおいてきてしまったなら何の役にも立たないのと同じである。
 4. 詩篇の作者は言う。「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にかくわえました」(詩篇 119:11)。「我が神、私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたの教えは私の心のうちにあります」(詩篇 40:8)。
 5. Hi BA という高校生伝道の団体がある。ハンナさんの弟さんのエリヤ先生は、残念ながら、数年前に天に召されたが、その団体で事務局主事をしておられた。私もそんなに忠実なメンバーではなかったが高校生時代に参加していた。そこでは、毎週のこととして、一生懸命、聖書の言葉を覚えることを奨励していた。ナビゲーターという伝道団体もそうである。
 6. 古臭い方法と思われるかもしれない。しかし、聖書の言葉を覚えていなければ、実際にそれを悪魔との戦いで使うことはほとんど不可能である。なぜなら、それは知性や、思いや、理解を越えたバトルであるから。
 7. 安利淑(あん・いすく)という女性がいた。第二次大戦中、韓国(当時朝鮮)で、キリスト教信仰のゆえに日本政府に捕まえられ、死刑を宣告されるのであるが、投獄されたら、聖書も取り上げられることを予想していた彼女は、その前に聖書を必死になって暗記した。そして、実際、彼女は、獄中で、辛いとき、苦しいとき、悲しいとき、事ある毎に、聖書の言葉を思い出して、それを心で唱え、自らを励まし、また他の囚人に伝道し、助けた。
 8. イエス様も、ここで聖書のことばを暗記していたからこそ、悪魔に向ってそれを武器として使うことができたのである。

B. 更に、イエス様の勝利の秘訣は、聖書のことばを信仰をもって「そのまま」使ったことである。

1. 言い換えるなら、「神の言葉」を説明も、解釈もなく、そのまま、裸のまま、悪魔にぶつけたのである。
2. ある人は、悪魔の誘惑や試練と戦うとき、神の言葉そのものでなく、その神の言葉の説明や解説で悪魔と戦おうとする。
3. しかし、説明では悪魔は動かない。その位のことばは悪魔はすでに知っている。
4. 御ことばの説明を聞いて、私たちが頭で納得しても、それ位では試練に勝つことはできない。
5. み言葉の説明やそれに伴う私たちの納得は、一時的に、理性的に、感情的に私たちに力をもたらすように見えても、それでは悪魔に、試練に勝つことはできない。
6. それらに勝利する最終的力と権威は、聖書の言葉そのものの中にしかない。
7. 「何がどうのこうの」という理屈や、人間の説明や納得ではなく、「神はこう言われる」と言うとき、悪魔はたじろぎ、試練に打ち勝ち、乗り越える力が湧いてくるのである。
8. それは丁度、喩えていうなら、水戸黄門が、悪人たちを前にして戦うとき、何の説明も、理屈もなく、ただ、将軍家の権威の象徴である「葵の御紋」を見せて、「これが見えないのか」と言うとき、悪人たちがひれ伏すのと似ている。
9. 神の言葉の意味や説明に力と権威があるのではない、或は、それに納得したときに私たちに力が与えられるのでもない。力と権威はどこまでも、聖書の言葉そのものの中にあるのである。私たちは、それをそのまま、これが神のみ言葉であるという信仰をもって、悪魔にぶつかけるとき、悪魔は敗北するのである。
10. ビリー・グラハムという伝道者ほど、かつて用いられた伝道者はいなかったであろう。
 - (1)しかし、それは彼に霊的に一つの転機があったからである。

- (2) その転機とは、聖書の言葉の権威に自分の伝道の力のすべてをかけることであった。
- (3) 元々彼は有能かつ雄弁な伝道者であった。しかし、ご聖霊は、彼に語られた。彼が聖書の言葉を取りつぐときに、自分が説教者としてもっている御ことばを説明・開陳する能力に頼っている限り、その結果は、決して永続するものにはならない。彼に必要なことは、御言葉の説明にではなく、御言葉そのものが持つ権威にかけることだと。
- (4) それからの彼のメッセージは、変わった。物足りないと感じるくらいに単純になった。そして、彼はひたすら、“Bible Says”、「聖書は言う」と神の言葉をそのまま伝えるようになったと言われている。
- (5) それはさながら旧約時代に預言者たちが「主は言われる」と聖言を伝えたようにであった。
11. このことは言い換えるなら、聖書の言葉の権威と力に対する私たちの「信仰」である。
- (1) ビリー・グラハムにしてもそうであるが、イエス様は、ここで聖書の言葉の権威と力を信じていたのである。
- (2) 信じていなければ、御ことばを、そのまま裸で悪魔に突きつけることはしなかったであろう。

結 論

- ヘレンケラー(3重苦と言うハンディを抱えつつも、著述、講演、活動を通して世界的に社会福祉に貢献した)：彼女は言う。「私が毎日、最も愛読する書物、それは聖書です。私の辞書に“悲惨”という文字はありません。聖書はダイナミックな力であり、変わることはない理想を示すものです」と。